

日本教育心理学会第60回総会 JB03

保育における実践知への アプローチ はじめに

2018年9月15日(土) 13:00 ~
15:00 D307

企画・司会 秋田喜代美・天野美和子

登壇者

- 話題提供者：東京大学教育学研究科附属
発達保育実践政策学センター
野澤祥子・淀川裕美・高橋 翠
- 指定討論：無藤 隆 (白梅学園大学)
楠見 孝(京都大学)
- 司会：天野美和子(東京大学)
企画：秋田喜代美(東京大学)

本日の流れ



13:00-13:07 登壇者紹介・企画趣旨説明

13:07-14:00 話題提供 3 名一人 1 5 分

14:00-14:25 指定討論お二人から各10-12分

(以下は柔軟に)

14:25-14:35 フロアからの質問や意見交流

14:35-14:50 討論質疑を受けて 3 名から各 4 分

14:50-15:00 登壇者よりのまとめ

企画背景：チームで取り組む 保育者の専門性基盤となる実践知研究

乳幼児発達科学に基づく「保育実践政策学」の創成へ

子育て・保育領域



発達基礎領域



政策領域



人材育成領域

子どもの育ちを支えるより良い環境とは何か。

養育・保育の質向上を実現するために、総合的な研究を推進してまいります。

シンポジウム企画主旨 1

なぜ保育領域の実践知研究か

- 乳幼児期の教育の重要性が政策・社会・国際的に指摘（OECD,2013,2015,2018）。保育プロセスの質を決める重要な要因の一つが、保育者の専門性。
- 保育者固有の特性：
 - ①乳幼児の発達特性から言語的関与だけではなく、身体的関わりの側面が大きな役割をもつ。
 - ②養護と教育の一体的な展開、遊びと暮らし両面の保障。
 - ③長時間化の中で園組織がチームで協働して保育を行うための知識が必要。

- 小学校以上の教師とは異なる特性。教師の実践知研究は教科教育内容に関する P C K（pedagogical content knowledge）等を中心に数多く研究がされている。
-  保育者の実践知研究はそれ自体少なくその特徴をふまえた研究アプローチが必要。
- それは小学校以上の教師やその他職種にも新たな知見を提供できる可能性をもつのではないか

シンポジウム企画主旨 2

実践知研究のこれまでとこれから

●主なアプローチ

質問紙法：保育観やスキル等を項目によって問う

場面想定法：保育に関わる知識を問う

行動観察法：相互作用を特定の視点から捉える

面接法：(行動観察後に) 面接を行って記述しそれについて意図等を問う

ビデオ再生刺激法：特定の場면을振り返り意図を問う

多声的ビジュアルエスノグラフィ：他者のビデオクリップを通して信念や知識を問う

●課題：個人ベース、園のチームとしての保育の実践知、暗黙知に迫ることが難しい、言語に頼る方法では情動的側面も含めた専門知を捉えることは難しい。

この学術課題への試み

どのようなアプローチで実践知のいかなる側面をとらえることが可能か、何が明らかになるのか

どのようにそれを可視化することで、他者に共有可能とできるのか